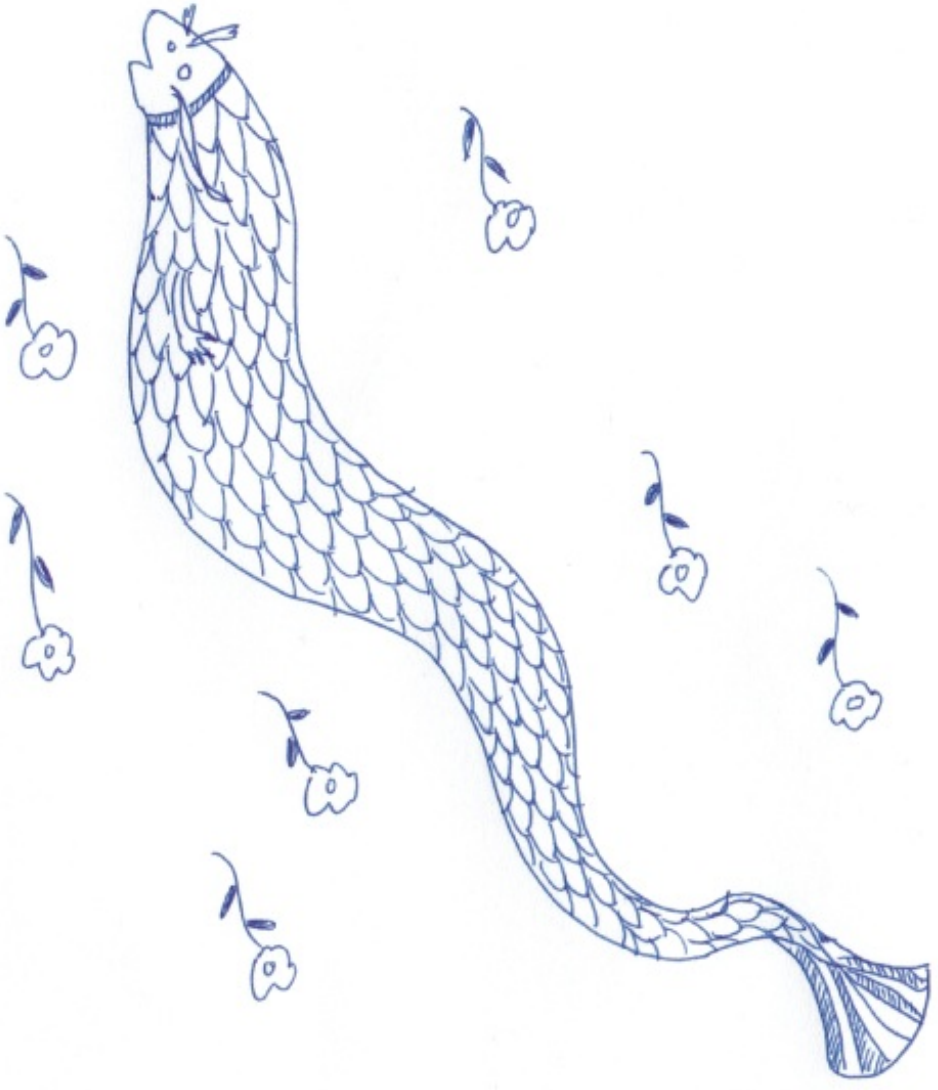
日々

nichi-nichi



Spring

「日々のこと」

みなさんはじめまして、こんにちは。

初めてじゃないみなさん、今日もこんにちは。

『日々（にちにち）』は、

想像力を大事にすることをモットーとした《ヨミモノ》です。

知っている人からすればあたりまえのことも、

知らない人からすれば絶好の想像のチャンス。

日々（ひび）の想像は、頭の中の小旅行。

あなたの少しの時間のお供になりますように。

コダマ

暦詞（こよみことば）「春うらうら」

名字のはなし

おもしろい名字、珍しい名字から思いついたことを自由にかきます

四. 鳥屋尾（とやお）

川の上流から、木製の箱が流れてきた。箱の中身は分からないが、すき間から青緑色をした何かがはみ出ている。青緑色は水面の少し下を、川の流れに合わせてゆらゆらとなびいている。男は藻かなにかだろうと思ってぼんやりと見ていたが、急に思い直して箱を追いかけた。あれはきっと、人間の髪の毛だ。箱の中を想像して身震いしたが、体が勝手に川の中へ飛び込んで箱を岸まで引き揚げた。青緑色が何なのかを確かめる余裕はなかった。箱にはかんぬきが掛けられていて、内側からは開けられないようになっていた。箱に耳をあてると、微かに息の音が聞こえる。今、開けますからねと箱に声をかけて励ますと、中から女の高い声が返ってきた。

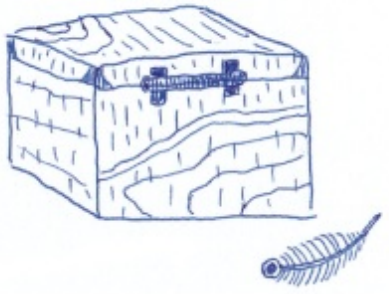
「開けなくてもいいわ。」

そんな返事をされるつもりはなかった。予想外の出来事に男は思わず言葉を失った。

「開けてもいいけど、開けなくてもいいわ。」

もう降参だ。外しかけたかんぬきをもう一度掛け直して、濡れた箱の前に正座をする。

女に訳を聞くと、都で若い女の体に鳥の羽が生える奇病が流行って、自分もその病にかかってしまったという。人によって羽の生える場所は違うが、女の場合は髪の毛が抜けて、かわりに羽が生えてきたそうだ。羽の生え変わる時期には禿げてみすぼらしい姿になるので、人目につかぬよう親に箱の中へ閉じ込められていた。ところが閉じ込められているうちに、かえって箱の中のほうが居心地が良くなってしまった。女がいつまでたっても箱から出てこようとしないので、親はこれでは嫁に行けぬと嘆き、とうとう川に捨ててしまったという。今いちど箱の青緑色を見ると、確かに鳥のそれであった。男は箱を開けることもできず、かといってそのまま放っておく訳にもいかなかったので、箱を布でくるんで大事に抱え、自分の家まで持って帰った。



名字のはなしのはなし

おんなおんな とりとりとりとり

「鳥屋尾」さんは半年程前にレジをしてもらったコンビニの店員さんなのですが、こんなに可能性を秘めた名字だったとは！と感動しました。今回の名字のはなしは「鳥屋に就く」という言葉からインスピレーションを受けています。鳥屋に就くというのは、羽が生え変わる際に鷹が鳥小屋にこもること、また隠語では遊女が梅毒にかかって引きこもることを意味します。どうしても隠語の印象が強く残ってしまいますが、うまい具合にファンタジーにできたかなあと自惚れています。鶴の恩返しもそうですが、鳥と女は相性が良いのかもしれませんね。

全国の鳥屋尾さん、いつもすてきなお名前です。ありがとうございました。

おんなおんな とりとりとりとり

今さら自己紹介①

大した学歴も経歴もないので、自己紹介してもしょうがないと思って多少イヂけて避けてきましたが、3つ上の姉からそれでは怪しいと言われまして、今さら自己紹介をしようと思います。

京都・亀岡生まれ　散文家
銅駝美術工芸高校 彫刻科出身
温室で働きながら絵を描き
文を書く。フリーペーパー「日々」
発行者。趣味はカレーリレー。

— 解説 —

亀岡 … 山に囲まれた霧深い場所。
トロッコ列車、保津川下りが有名。

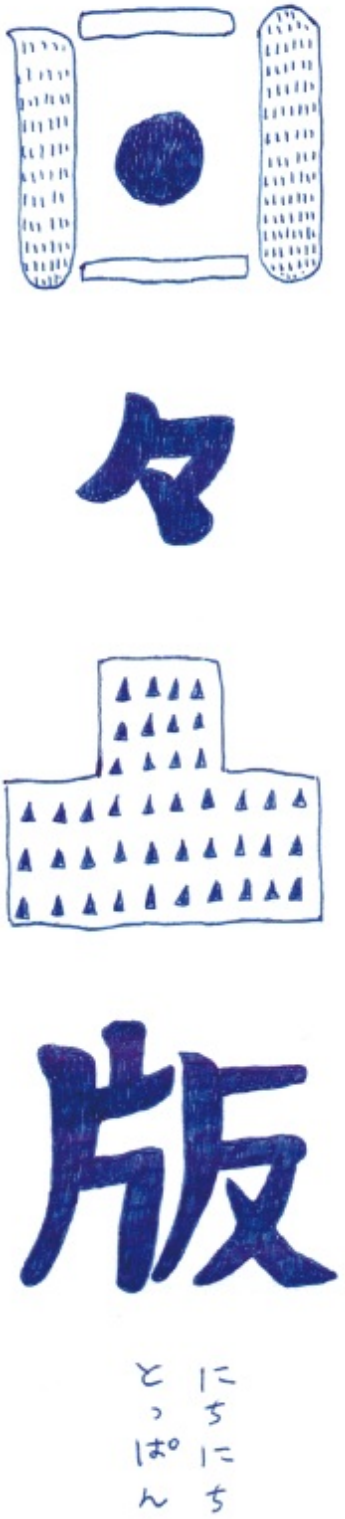
散文家 … イラストレーターでも小説家でもしっくりこないので勝手に散文家と名乗っています。

銅駝出身 … 卒業していません。

温室 … すーごいたくさんの植物の中で働いています。

日々 … 自分の頭の中のアイデアを形にするべく始めました。唯一の経歴です。

カレーリレー … カレー屋さんの好きなカレーを渡り歩く、リレー形式のカレー巡り。京都からスタートし、大阪、三重、兵庫、名古屋まで広がっている。



自信に思い立ちまして

カレー、やります。

日々カレー販売へ

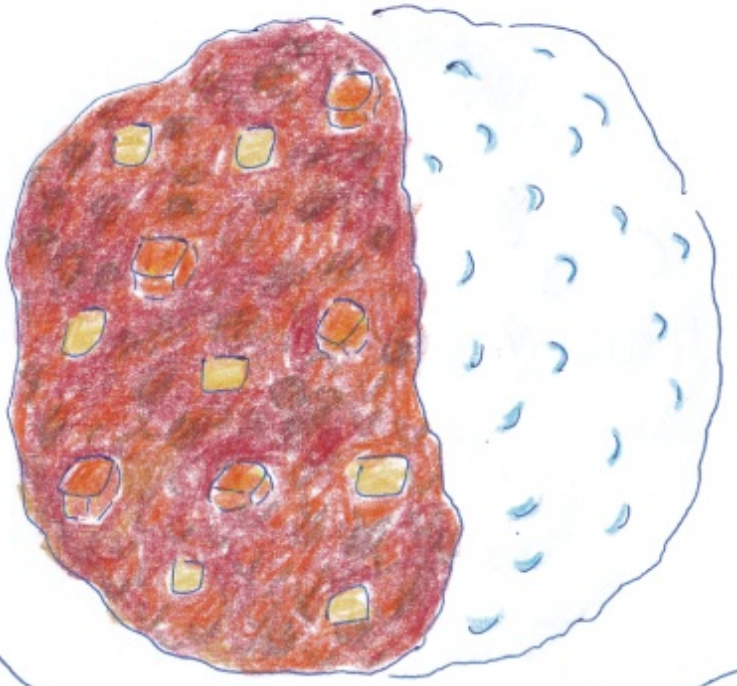
フリーペーパー「日々（にちにち）」発行者コダマ氏がこの春、急に思い立ってカレーを販売することが分かった。代理人の日々くんに取材したところ、大阪にある油野美術館で開催される「カレー事情聴取」という今熱いイベントのアマチュア枠で参加するようだ。出店するのは四月二二日(土)、十二時～十六時の昼の部で、一日限りの出店ということだ。屋号はフリーペーパー「日々」に因み「日々凸版（にちにちとっぱん）」とし、当日は「トマトの魔神キーマ」と称したトマト味の効いたキーマカレーを販売する予定だ。コダマ氏は出店に踏み切った大方の理由を「急に思い立ったので」としているが、日々くんによると「コダマ氏は最近スパイスもりもりのカレーを食べることに疲れていたようで、スパイスも辛いのも好きだけど本格的すぎるのには手がついていけない！

というカレー好きの心と胃を満たすようなカレーがあれば、という想いがあったようだ。」とのことだ。最近はだいたい週に一回ちゃんと材料をはかってカレーを作っているとのことで、この「日々」が日の目を見る為にも頑張ってもらいたいところだ。

あれそれカレー

トマトの魔神キーマ

カレー皿



第三回（いざ、カレーを作る）

「日々（にちにち）」を初めて手に取って下さった方に自己紹介をしますと、わたくしコダマはカレー屋さんの好きなカレー屋さんを渡り歩く、「カレーリレー」を個人的な趣味でしております。（食べる専門です。）その私が、この度カレーを作って見ず知らぬ誰かに食べてもらうことになったのです！

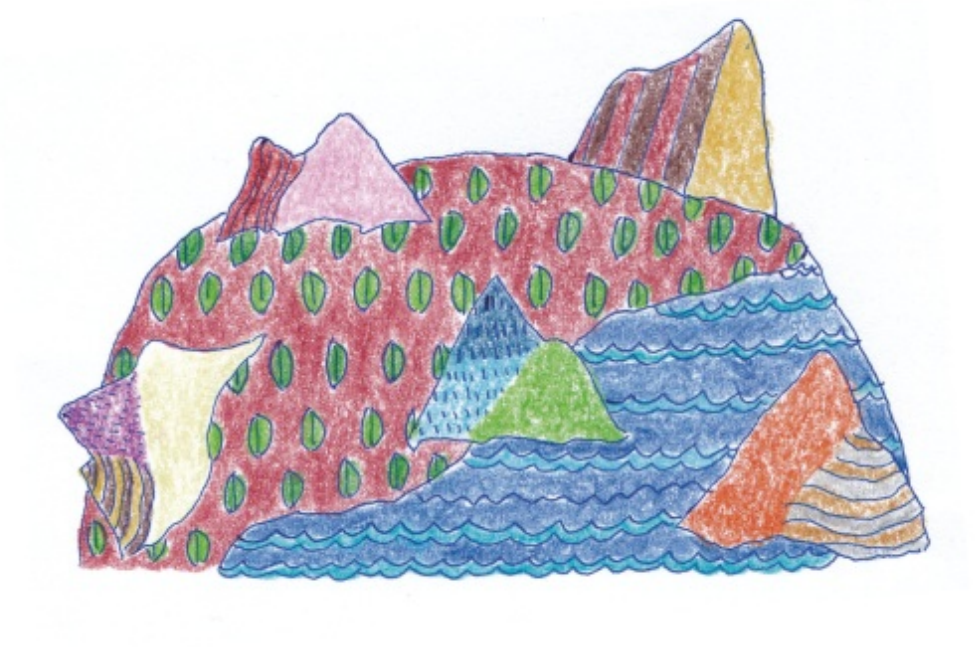
一人で盛り上がっているようで恥ずかしいですが、私にとっては、そしてひなくとも私の家族にとってはイチダイジなのです。スパイスは、にんにく・しょうが・唐辛子・クミン・コリアンダー・カルダモン・ガラムマサラ。水分のほとんどはトマト缶。

そして、大手食品メーカーの厚意の結晶、市販ルウも堂々と使います。

まだまだ試作中（一月時点）ですが、トマトの魔神キーマいざ出陣です！

トマトの魔神

skoshi hanashi（すこしはなし）「星のあるところ」



skoshi hanashi
すこしはなし
—Spring—

その星の名を仮に「α-3」としよう。地球と同じように水と緑のある星だ。発見したのはあまりこだわりのない天文学者で、α-3をみつけた時も『新しい名前を考えなくちゃいけないなんて面倒くさいなあ』と思うような人間だった。こだわりのない天文学者はα-3のことを、地球となんら変わりのない星なんてつまらないとさえ思っていた。今まで誰も見たことのないような星を発見するのが、彼の夢であり唯一のこだわりだったのだ。そうこうしているうちに天文学者はα-3のことをすっかり忘れて、そのまま寿命で死んでしまった。

α-3は再び誰かに発見されることもなく、ゆっくりと歳を重ねた。α-3は地球となんら変わりのない星だったので、存在する生き物やそれらの進化の過程にもなんら変わりはなかった。ただ、どういうさじ加減でか、人間に相当するような生き物はいないようだった。又、α-3の山は地球と比べてのびのびと大きく育った。その中でも5つの山が大きく育ち、「五賢山（ごけんざん）」と呼ばれた。どうやって決めたのか知らないが、五賢山はそれぞれ賢い順に一の山、二の山、三の山、四の山、五の山と名乗った。五賢山にはよく見える目、よく聞こえる耳があり、山の所々に開いた穴で、笛のように音程を変えて歌をうたうこともできた。そしてなにより素敵なことに、母なるα-3と会話をすることができた。

skoshi hanashi（すこしはなし）「星のあるところ」

宇宙の星はそれぞれ言葉を持つ。星の言葉はとても古い言語なので、理解するのは難しく、話すのにとても時間がかかる。α-3の言葉は釜から出したての器が冷えるときの音のような、高く、細く、繊細な言葉だ。五賢山は聞き漏らすことのないよういつも耳を澄ませ、一つ一つの言葉を注意深く拾った。

ある夜α-3はいつもより長く、そして少し沈んだ声で、五賢山に語りかけた。

「私の大切な友人である1つの星が、今にも死のうとしています。あなたたちの場所からも見える、青く光るあの星です。病気ではありません、寿命です。宇宙の摂理です。これまでいくつもの星が死にましたが、その友人は特別です。私たちは長い時間をかけて、色々な話をしました。宇宙にはたくさんの星が存在しますが、言葉が通じる星はほんのわずかです。私たち星にとって会話をする相手がいることは、それはもう例えようのないぐらい素敵なことなのです。それなのに、友人はもうすぐ死んでしまいます。友人の体はもうずっと前から内側から少しずつ膨らんでいて、ここ数週間は息をするのもやっとです。そのうちに形を保てなくなって、とてつもなく重い角砂糖のようになってしまうでしょう。そうなれば、今までのことはすべて忘れてしまいます。自分がどんな星だったのかということさえも忘れてしまいます。忘れることは、何かを失ったことを思い出すより悲しいことです。」

α-3の言葉はとても長く、五賢山は互いに話し合いながら1週間かけて理解した。そしてもう1週間かけて、α-3にかけてあげられる言葉を捜した。

「それで、あなたは？」

「…友人はとても塞ぎ込んで、私を遠ざけます。」

「それでも、あなたは？」

α-3は私は、私は、と言葉を詰まらせて黙り込んでしまった。他の山がα-3の言葉をじっと待つなか、五の山が切り出した。

「それでは、どうか私の代わりにあの青い星の傍へ行き伝えてください。私たちはあなたを知っていて、あなたのことをずっと覚えていると。そしてあなたのことを想う素敵な星のことも私は知っていると。」

この数十年で地球の科学技術はうんと進んで、宇宙にいくつもの衛星や探査船が打ち上げられたが、とうとう今日までα-3が再び誰かに発見されることはなかった。不思議なことに、私たちは誰が伝え残したのかわからない、そして誰も実証することのできない昔の話を知っていたりする。誰から聞いたでもないのに、なぜか知っていることもある。α-3の話もそれらの類なのだろう。ほんとうかどうかも、誰に聞いたのかも分からないけれど、私はそんなα-3の話を昔から知っている。

—星のあるところ—

星のあるところあとがき

今回はＳＦ的なものを書こうかなあと思って、地球に似た名もなき星でのことを書きました。四方を山に囲まれた場所で育ったせいか、五賢山に一番思い入れがあります。昼の山は安心感を与えてくれますが、夜の山は空よりうんと暗く、黒よりも黒いちょっと恐ろしい生き物のように感じます。そんな山がその星に生きる者の中で一番賢い生き物だと良いのになあと思ったのが五賢山のいるα-3誕生のきっかけです。星のことを書いていると、多少気持ちも壮大になります。星が死ぬと、宇宙空間には様々な物質が放出されるそうです。その物質の中には、私たちの体を作る、大切な物質も含まれています。ということは、私は遠い宇宙で死んだ星の残骸なんかしらねと、そんなことを考えてしまいます。またα-3は『忘れることは、何かを失ったことを思い出すより悲しいことです。』と言いました。生きているとその途中で色々なものを失います。それらを思い出すことが辛い人もいれば辛くない人もいて、無駄だと言う人もいます。思い出すということは過去へ脳内トリップするようなものです。トリップしながら羞恥心に身悶えしたり、しくしく泣いたり、時にはにやにやしたり。良いことばかりじゃないでしょうが、悪いことばかりでもないでしょう。頭の中で今と昔を行ったり来たり、それで良いと思うのです。そして未来の私はすべてを忘れてしまう前に、忘れることは良いもんだとでも言うのでしょう。それもそれで。それでいいのだ。

今さら自己紹介②

なんなら習いごと歴の方がちゃんとあるんじゃないかと思いまして
ついでに紹介します。

① 年中さんと中3まで通う

子どもアトリエ

傑作なんで作。
「親子でうきん」

↑なんで縫っただけの作。(5、6才)

② 平泳ぎまで
次のバタフライは格好悪くて嫌だった

スイミング

③ 音符の長さから何拍子からがわからず、

ピアノ

先生が見本で弾くのを聞いてメロディーを覚えた

④ 茶色帯まで(黒帯の手前)

空手

柔道は夜の教室しかなく、昼の教室がある空手をする。

⑤ ゴムゴムの競技場で走る

陸上教室

教室おわりのカルピスソーダが流行る

⑥ 大人の習いごと

ホットヨガ

案外体育会系、なのでした。
おかげで丈夫に育ちました。

end

日々

nichi-nichi

2017 Spring号

イラスト＆文：コダマ

mail : codama235@gmail.com

～日々を読んだ感想、又コダマに興味を
持って下さった方のご連絡をお待ちして
おります～